

⑩ 書道講習会と石橋犀水

敗戦によって軍国主義日本が崩れ去るや、政府はGHQの指令に基づいて民主化、近代化政策を次々と打ち出したが、これに即応して芸術の分野ではまず民主化、近代化の方法として西欧先進国の芸術を手本とすることが行われ、恰も明治維新直後のように西欧芸術の風潮が生じた。それは戦時中に著しい圧迫を受けていた西欧芸術志向の解放でもあり、展覧会や出版物によって、西欧芸術の動向が紹介され、歓迎されたが、一方、戦中の日本中心主義に支えられて曲りなりにも安泰を誇っていた伝統芸術、日本画、書、邦楽等々は甚しい否定を蒙り、一種の自信喪失に陥って低迷を来した。その苦境の中から、やがて新しい動きが始まり、日本画の分野では昭和二十三年一月に、戦前における日本画壇の封建的因襲を払拭して「世界性に立脚する日本絵画の創造」を期する画家の組織、創造美術が発足する。本校日本画助教授山本丘人はその主要メンバーの一人であった。

書道界で最初にこの低迷打開に立ち上がったのは本校講師石橋犀水である。書家、書道教育家として名高い犀水は、昭和十四年から比田井天来の後任として本校図画師範科の習字指導を担当していた。彼は戦後小学校教育から毛筆習字が排除されるや、たびたび文部省へ復活の請願に行った。上野直昭日記（昭和二十二年十二月十八日）によれば、彼は同僚の尾上柴舟とともに、本校に書道科を設けるよう運動もしている。

彼の書道復活運動の中で最も大きな効果をあげたのは、昭和二十三年、二十四年の二度に亘って本校で開催した書道講習会であって、これは戦後の書道界発展の一つの契機となったと言われている。第一回は文部省、東京美術学校共催書道講習会と称して昭和二十三年六月一日から十月二十二日までの間を前期、後期に分けて開催された。要項が現存していないので詳細不明だが、受講者の一人寺沢秀（星度）によれば、講師は石橋犀水、村田良策、加藤常賢、尾上柴舟、辻本史臣、浅見喜舟、田辺古邨、井上桂園、金田心象、藤田讃陽、続本湖山、鈴木翠軒、上田桑鳩、高塚竹堂、服部北蓮らであったという（文部省・東京美術学校共催長期書道講習の回顧『書学』五四・五二五号。平成五年十一月、十二月）。上野直昭も講師としてレオナルド・ダ・ヴィンチについて説く筈のところ停電で中止した旨を日記（十月二十、二十一日）に記している。この会の実質上の指導者は犀水だが、文部省社会教育局長柴沼直と上野直昭を顧問とし、賛助員二十六名を置き、そのなかに犀水は本校の中村正義、村田良策、尾上柴舟らとともに名を連ねるというかたちをとった。

受講申込み受け付けの当日の様子を前出寺沢は次のように記している。

上野の森の中にある芸術人あこがれの学校、その中に「書道大衆」を現出させた功績者、先生のもとに、全国から、書道内地留學生が殺到した美術学校の玄関受付は大混乱し、定員外でも、立見席でもよいと、嘆願・哀願する人で埋めつくされた。犀水先生の前には、悲願の人々が押しよせ、騒然たる状況であった。未だ

曾^{「や」}つてこれ程の書道志願戦争とも云うべき、入門風景を見たことがない。正に「鉄門限」たらざるを得ない状態であった。「求道必死」座り込みを辞さない数人も出たほどである。

第二回講習会については前出『書学』の石橋犀水追悼特集号（平成五年十月～十二月号、同六年六月号）に要項が掲載されているので左に転載する。

文部省共催第二回書道講習會要項 東京美術學校

趣旨 書道文化の振興と書道（習字）科教員養成の目的を以て左記要項の長期講習會を開催する。

一、主催 文部省・東京美術學校

二、會場 東京美術學校（東京都台東區上野公園 上野驛又は鶯谷驛下車）

三、期間 1、前期六月一日（豫定）七月二十日
2、後期九月十日 十一月十五日

但し七月二十一日より九月九日迄は家庭實習

四、機構 1、一般部（學校開放講座） 若干名
2、中學校教員（養成）部 一〇〇名
3、高等學校教員（養成）部 五〇名

1、一般部（學校開放講座）は資格を問はず。
2、中學校教員（養成）部は小學校本科教員免許狀又は小學校習字専科免許狀を有する者で新制中學校

五、受講 以上の學校に於いて習字及國語科を擔任してゐる

資格 者

3、高等學校教員（養成）部は舊中等學校書道科免許狀所持者で現在中學校又は高等學校及び教員養成諸學校に於いて書道科（習字）を擔任せる者

六、特典 講習修了者に對しては書道科（習字）に關する單位修了證明書を授與する。右修了書所持者は將來中學校（國語）高等學校（書道）教員本免許狀受領に際して有利な條件とされる豫定。（申請中）

註 中學校の習字は國語科に含まれることになつたので國語科免許狀が授與される。

七、講習内容

講義内容

（一）一般部（學校開放講座）中學校、高等學校教員部の實技を除きたるもの。

（二）中學校部

1、一般教養 六單位（一週六時間）

人文科學關係

哲學（一）東京美術學校教授 小塚新一郎

藝術學（二）東京美術學校教授 村田 良策

東洋倫理學（三）東京大學教授 文學博士 加藤 常賢

自然科學關係（一）未定（交渉中）

社會科學關係（一）元法制局長官 入江 俊郎

（新憲法論）

2、教職教養 六單位（一週六時間）

教育原理(一)文部省師範教育課長

玖村 敏雄

〃 (一)東京美術學校教授

西本 順

教育行政(一)文部事務官

上野芳太郎

教育心理(一)文部事務官

井坂 行雄

學習指導(一)文部事務官

石森 延男

教授法 (一)東京美術學校講師

石橋啓十郎

3、專門教養 十八單位（一週三十時間）

(イ)書道 理論

中國書道史(一、五)東京美術學校講師

石橋啓十郎

日本書道史(一、五)東京美術學校講師

尾上 八郎

鑑識及書論(一)文部省檢定試驗委員

鈴木 春視

文部省教科書編修員

高塚 錠二

前日展審查員

辻本 勝己

前日展審查員

西川 寧

成城高等學校講師

上田 順

文部省教科書編集員

金田 吉尾

特殊 講座(一)東京美術學校校長

上野 直昭

日本藝術院會員

豐道 慶中

前日展審查員

川村眞一郎

成蹊女子高等學校校長

奥田 正造

元女子學習院長

下村 壽一

(ロ)書道 實技(六)(一週十五時間)

日本藝術院會員

文學博士 尾上 八郎

東京美術學校講師

文部省檢定試驗委員

石橋啓十郎

文部省檢定試驗委員

鈴木 春視

文部省教科書編修員

高塚 錠二

千葉師範學校教授

淺見 錦吾

廣島高等師範學校教授

文部省檢定試驗委員

井上 政雄

東京都立第五女子高等學校講師

田中 重三

日本女子大學講師

藤田 民治

東京第三師範學校講師

田邊 萬平

學習院助教授

仲田 幹一

文部省教科書編修員

金田 吉尾

補講 東京都立第六女子高等學校教諭

熊田傳一郎

神奈川師範學校教授

中田 彌一

埼玉師範學校教授

服部 誠一

(一)國語國文學(一)東京女子高等師範學校教授

次田 眞幸

國語國文學(一)東京高等師範學校教授

石井 庄司

國語漢文學(一)東京大學教授

文學博士 加藤 常賢

國語漢文學(一)東京大學助手

大濱 浩

(二)美學美術史(一)東京美術學校教授

脇本十九郎

(三)高等學校部

一般及教職教養の科目は中學校部と同一とし専門教養の教科課程及講師は右の中より別個に立案して實施する

八、受講料 一般部 前期六〇〇圓 後期六〇〇圓

教員（養成）部 前期一、〇〇〇圓

後期一、〇〇〇圓

九、申込

(イ) 一般前期は五月十日より五月二十日まで、後期は九月五日までに（受講料各々六〇〇圓を添へて）直接東京美術學校書道講習會係宛に申込みこと。

(ロ) 教員養成部は別紙申込書の該當欄に夫々記入の上、査料（三〇〇圓）小爲替券を添へ所屬長官の承認を経て五月五日までに東京都台東區上野公園内東京美術學校書道講習會係宛に申込みこと。

(ハ) 受講者の選拔査査は五月八日午前九時より正午までに各府縣師範學校（二校ある場合は第一師範學校）に於いて文檢豫試の要領に準じ之を行ふ。

但し東京・埼玉・千葉・神奈川は直接東京美術學校に於て之を行ふ。（用紙用具等は各自持參のこと。）

受講申込者は受講料金送付の小爲替受取票を持參して當日受驗票を受領すること。

(ニ) 答案は速達にて東京美術學校に送付五月二十日審査檢定の上合格者には電報を以て通知する。

(ホ) 合格通知を受けた者は五月二十七日迄に速達にて正式に申込をすること。會費は開講當日持參してよろしい。尙當日迄に申込のない者は入會を取消す。

備考

(1) 一旦納付した査料及受講料は如何なる理由あるとも之を返

濟しない。

(2) 受講者は都道府縣教育廳（學務課）教員組合等の了解を得て内地留學の形式をとられることが最も便宜と思う。

(3) 實技講習手本料は本會に於いて豫め準備してあるが單行本のあるものは持參した方が便利である。

(4) 在京中の宿泊食糧等はなるべく早目に知人親類等に交渉して定め置かれること。なほ外食券は本校食堂にても使用出来る。

(5) 規則書入用者は返送用封筒（切手貼付、表書記入）を同封の上東京美術學校書道講習會係へ申込みこと。

(6) 講習に必要な用具は校内に賣店の設備はあるが一通り持參するがよい。

⑪ 夏季洋画講習會

昭和二十三年七月二十六日から六日間、美術出版社が常設の美術研究施設を利用しない人々のために本校で夏季洋画講習會を開催し、百二十人が参加した。内容は凡そ次のとおりであった（『美術手帖』第十号。昭和二十三年十月）。

第一日 村田良策講話「美術家というもの」、碓伊之助、寺田春式、岡鹿之助、荻須高德指導実技（石膏デッサン、油絵人物、屋外写生）

第二日 吉川逸治講話「リアリティについて」、実技（同前）

第三日 今泉篤男講話「ヴァールについて」、伊藤廉指導実技、今泉篤男の案内による国立博物館近代洋画展観見學